

樋口陽一 様

前略

「人権原論 国法学」の惠贈に与かり本当に感謝です。現代において、そして貴兄に対して待望されていた書物だと思います。

憲法学は何と広大な領域を擁することになったものか、全く隔世の感です。かつての近代理念の平面的解説やそのイデオロギー的変色が試みられていた時代がかわいくコンパクトにみえます。

人々を糾合できる目標が定かでなく、文明批評でさえ漂流するような時代になりました。この混とんの世界で、個々の実定技術法とは異なり、広域の実際問題を視野に入れながら、全般的な基準を呈示しなければならない憲法学は、自ら、理念自体の創出あるいは修正にも携わなければならないかも知れず、恐ろしく大変に想えます。比較憲法学の出番でしょうか。国法学という題名は面白いです。

貴兄の場合、西欧近代のコモンセンスがたんに考え方の参考として受け入れられているのではなく、血肉となり、その精神からの強い放電があることをいつも感じさせられてきました。この人類の貴重な遺産を深く体得している力量がいま役割を演ずべきときのようにです。

今回の人権原論は、縦軸の深さにおいて比類がなく、時代の広がりをも克明に視野に入れて原理を関連づけた画期的仕事であるという感想をもちました。

小生が弁護士になりたての頃、先輩の書面に「極悪非道の人間の人権こそ守られなければならない」という記述をみて、違和感を憶えたことがありながら、しかし、ずっと長く類似の主張が続けられてきていても、反駁は容易ではないままきておりました。今回このことについても示唆を与えられ自分なりに整理ができたように思います。

近年の法思想が人権概念に人倫的要素を加味する見地を出していることは窺えていたのですが、こうした諸見解がこの著書で紹介され、それぞれ位置づけられ、今後こうした観点が重要度を増していくだろうという期待をもちました。

「スカーフ着用禁止」はかねて興味のある問題でした。ヨーロッパに政教分離の歴史教訓があることを教えられ理解できました。ついでにマルクスの「ユダヤ人問題によせて」を読みその行間からも、政教分離が最良の知恵であることをさらに諒解した次第です。原理主義者も日本の首相もこうしたレベルが分っていない……。

人権は、その虚偽性、放縦の側面がずっと指摘されてきたにもかかわらず主要文脈において市民社会の健康な起動力であったわけですが、今後なお人々を吸引していくために（そうでなければ困るのですが）概念 コトバ が賢明に練り上げられて欲しいと思います。

「強い個人でよいか」の項で、近代の自己決定という形式において、個人の尊厳を追求することは綱渡りの側面があるとされ、「つきつめればバランスをなくして墜落するかもしれない、そうした綱渡りを、その手前のほどほどの所で賢明に処理する仕事が、いみじくも（法の賢慮）と呼ばれてきた領域であり、……そこををあえて問いつめる思想のいとなみに裏づけられてこそ、深淵を見すえたうえでの（賢慮）が可能となるはずである」と書かれていますが、大切な指摘と思います。

昨今、弁護士界などでは、単純に人権が主張される傾向があり、他方ポスト・モダンの思想界では「普遍主義」が勢力を失ってきているように見うけられます。「異なった地域では異なった倫理、法がある」などといわれたりもしています。

「人権の普遍性」は偏向のこの両極を相手にしなければなりません。生得の権利等の考え方は古いとしても、いつでも人間社会には灯火が必要であり、それは必然的に求められているものでもあると思います。人権の観念は、そうした理念であり、共同体の討論だけに委ねることのできない、まさに賢慮が見出し、構築すべき道しるべの面があると考えます。

貴兄の立場は本当に大変です。今後も精進を続けられることを願っております。

（2004年3月）